

札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ
 (財) 札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)

3 ファンクラブ合同山形交流会開催 オーケストラファンクラブ「山形宣言」発表



8月27日(土)山形市で山形交響楽団第167回定期演奏会を鑑賞した後、山形グランドホテルで山響ファンクラブ(山響FC)、仙台フィルハーモニークラブ(SPC)、札幌響くらぶの合同交流会が行われました。

山響FC加藤会長の歓迎の挨拶、SPC工藤会長と札幌響くらぶ西川事務局長の挨拶後、和やかな交流が行われました。この日山響初登場の尾高さんも最後まで出席して下さいました。いつもの尾高さんの軽妙なスピーチや、各クラブの参加者の紹介等が行われた後、「2005オーケストラファンクラブ山形宣言」が発表されました。

これは、西川事務局長が提案され、各クラブの会

長・事務局長の賛同を得たもので、全国のファンクラブが協力して音楽文化の発展と、「おらが町のオーケストラ」を守り育てることに寄与するために、「全国オーケストラファンクラブ(JOF)」(仮称)の設立を呼びかけていこうというものです。

交流会席上、山響FC伊藤事務局長によって宣言が読み上げられ、出席者全員の盛大な拍手により承認されました。尾高さんも盛んな拍手で賛意を示しておられました。

今後、具体化に向けて来年札幌での交流会を実現するなど、札幌響くらぶが中心になって活動を進めていくこととなります。楽しいだけでなく、有意義な山形での交流会になりました。



札幌響くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

事務局長に聞く

財団法人札幌交響楽団
事務局長

宮澤敏夫さん

みやざわ としお

札幌は必ず
理想のオケになれます!!



宮澤敏夫さんのプロフィール

台北市生まれ。武蔵野音楽大学器楽科卒業。コントラバスを檜山薫氏に師事。卒業と同時に大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。73年ウィーン国立音大に留学。78年文化庁芸術家派遣在外研修員として再度ウィーン国立音大に留学。帰国後首席奏者を務めながら、大阪フィル・京都市交響楽団などオーケストラとソロで共演。木曾音楽祭などに出演。86年楽団事務局長に就任。93年退団し上京。(社)日本演奏連盟入社、翌年事務局長就任。98年退社し企画会社(株)ゾロカンパニーを設立。現在大垣音楽祭・倉敷音楽祭・日光金谷ホテル音楽祭プロデューサー他、木曾音楽祭などに関わり地方文化の啓蒙発展に、また若手演奏家の育成(現在は小澤征爾氏指揮セミナー開催中)などを目的とした講習会を毎年開催するなどの音楽プロデューサーとして活躍。

2004年8月、札幌交響楽団事務局長に就任。

8月9日、スタッフ会議に宮澤さんをお迎えし、札幌くらすの今後の活動に示唆を与えていただくために、宮澤さんの札幌そして、音楽文化、オーケストラ、プレイヤー等に対する様々な思いを伺いました。

今回は、日本のクラシック音楽の振興に深く関わってこられた宮澤さんのお話を、その一部ではありますが皆様にお伝えいたします。

私が北海道に来たことと、私がやってきたこととが、これからも私について回るのだと思いますのでちょっとお話ししようと思います。

北海道に来て、まずは札幌が大変なブランドだということにびっくりしました。北海道には一つしかなく、伝統もあるということかなと思いますが、私は東京や大阪のいくつもオケがあり、お互いに常に切磋琢磨と言えば格好いいのですが、実際には足の引っ張り合いという世界で生きてきましたから、ここに来て、皆さんが札幌をすごくあたたかく見ているということにもものすごくびっくりしましたし、素敵だなとも思いました。ここなら私が夢にしていた「おらが町のオケ」というのが、可能性がいっぱいあるな、というのが最初の印象でした。

私が元々考えていたのは、地域の文化の啓蒙、そして若手の育成ということでした。大学を卒業して大阪に戻ってきて大阪フィルに入って、すぐに結婚して、妻の里である和歌山に住みました。ある時に有名ヴァイオリニストと和歌山出身のお弟子さんとのコンサートがあって聴きに行きましたが、びっくりしたのは聴衆のレベルの低さと、そう言うては申し訳ありませんが、お茶を濁すような演奏でした。後で聞くと、それはお弟子さんの弓を買うための資金集めのコンサートのようなようでした。私はずっと住むつもりでしたから、これはとんでもない所に住むことになるな、と思いました。で、自分で企画プロデュースする音楽会を始め、大阪に通いながら「こんな和歌山をつくりたい」と訴えてチケットを売って歩きました。そんな無理がたたって、倒れてしまったのですが、その時に思いもよらず、それを見かねた100人からの仲間が突然出来ました。そして和歌山音楽振興会というのが出来たのが、25歳の時でした。それは啓蒙的な団体として今も続いています。私自身オケのプレーヤーでしたから、ソリスト達とは友達で、彼等に協力を願い、又、当時の梶本音楽事務

所の社長に理解を得て、廉価でコンサートをやりました。今も続いています。しかし、それは普通のコンサートで、それとは別に100人の仲間のためだけのサロンコンサートをやりました。それは、100人の聴衆としての頂点を作ろうと思ったのです。100の頂点ができればその下にすそ野が広がり、多勢の愛好家が出るだろうと思ったのです。

当時来てもらった音楽家は、誰でもが名前を知っているような錚々たるメンバーでした。そういう人達との繋りがどんどん出来ていくうちに、文化庁から派遣されてウィーンに留学しました。帰国すると、すぐにその人達に呼ばれて、木曾福島音楽祭に行きました。それからずっと何年間か続けて参加させてもらいました。実は、私のほとんどの原点は木曾福島にあるといえます。そこで、地元の人達と演奏家との繋りの大事さを教えられ、一番の基本は人との繋りだ、ということを今も一番に大切にしています。それが高じて、倉敷音楽祭を作り、大垣音楽祭を作り、今は日光で音楽祭をやることになりました。最初に申しあげた「地元の文化の啓蒙」という点で言うと、こういう音楽祭を通してすごい演奏を聴くことによって、本物とはどういうものなんだということを知ってほしいと思ったのです。

私は演奏家としては42歳で終わりました。当時大阪フィルが大変な時期で、演奏がひどいので建て直せということで、私にいろいろな人脈があったからでしょう、白羽の矢を建てられて、楽器をやめているいろいろな改革に取り組みました。若かったので急激な改革をやり、ユニオンと衝突しました。こちらは何とか良くしようと思って、楽器をやめてまで事務局に入って努力しているのに、「それじゃ」と言って、東京に出て演奏連盟の事務局長になりました。

当時出来た文化庁の外郭団体「芸術情報プラザ」に音楽上のアドバイザーとして入ることになり、地方のホールが建つ時、建った後の運営等のお手伝いをして、多くの地方と繋りが出来、いまだにたくさんさんのホールとお付き合いがあります。

私は、常に若い人を育てることを心がけて、音楽祭では新人オーディションをやり、一流演奏家に交じって（カルテットなど）教育してもらおうシステムを作り、又、優秀な人には奨学金を与えるなどしてやってきましたから、いまだに若い人たちとの繋り

はすごく持っています。

今回札幌に来たのは、実は話は尾高さんからですが、私は尾高さんからすれば何番目かの候補者だったと思います。多分、何人かの人に声をかけたのだと思いますが、「もうオケはやらない」「オケは絶対いやだ」というようなことをご存じだったかと思いません。オケのように、多くの人を扱う仕事は、うまくいっている時は良いのですが、一つまずくなると、それはもう地獄です。私もつらい経験をしていて、二度とオケはやらないと思っていましたから、尾高さんもそれを知っていて声をかけなかったのだと思います。どうしても人がいなくて、携帯に僕の番号



があったので、たまたまかけてみたのではないのでしょうか。その時は息子が電話を受けて、後で聞いた時に直感で「あっ、そうなんだろう」と思いました。よほど困っているのだろうとも思いました。それで、一年待ってくれるならやってもいいよ、ということで来させていただくことになりました。

大阪で1年間、選挙事務所の局長をしながら、大阪フィルと札幌の定期を聴き続けました。札幌と大阪フィルの楽員の顔つきが違いました。大阪は暗い。これは商売にならないぞ、と思った程です。札幌は音楽をするぞという意気込みが顔に出ていて、お客様もとてもあたたかい。これはすごい、ここならヨーロッパのような「おらが町のオケ」が出来るのではないかと思いました。私の仕事はオーケストラを良くすることで、徐々にではありますがやってきているつもりですし、頭の中にはフォルムが出来ていまして、もしこれを2年でやれたらどこまで良くなるか、と思っています。

(佐藤良次)

山形訪問の記

山響F C（山響ファンクラブ）・SPC（仙台フィルハーモニークラブ）・札幌くらの3ファンクラブ合同の交流会には西川事務局長、武藤・佐藤両事務局次長・スタッフの佐々木さんの4名が札幌から出席しました。その山形訪問のあれこれを、会員の皆様に楽しくお伝えいたします。

8月27日午後3時、前日に山形入りしていた佐藤と他の3人が宿泊先の山形グランドホテルで合流しました。「とにかく暑い」全員の感想でした。当日は31度位だったのでしょうか。しかし、せっかくの山形ですから、暑さに負けてはいられません。市内見物に繰り出しました。

まずは、元の県庁で現在は山形県郷土館として公開されている重要文化財の「文翔館」へ。札幌で言えば赤れんが庁舎のようなものではないでしょうか。その中の元県議会議場が山響の練習場として使われています。当日は結婚式の会場になっていました。

続いて、山形城址である霞城公園へ。風情のあるお堀を渡って再建された東大手門をくぐり、園内に移築された旧山形市立病院済生館へ。これも重要文化財の明治時代の洋風木造3階建てで、現在は山形市郷土館として公開されています。

ずっと徒歩で、約2時間の市内見物を終え、山形発祥の「冷やしラーメン」を食べてみたいという希望で、ホテル近くの元祖の店として名高い「栄屋本店」へ。いつも行列が出来ているのに行列はなく、「ラッキー」とばかり店内に入ると満席状態で、かろうじてテーブルが一つだけ空いていました。遅くに昼食を食べた佐藤はパスし一人ホテルへ。

6時に再びロビーに集合し、演奏会場の山形市民会館へ。「冷やしラーメン」の感想を聞くと、3人とも「微妙だねー」。いわゆる「冷やし中華」とは違い、普通のラーメン丼に入ったラーメンが冷たい状態で出てくる。「まずいとは言えないが、うまいとも…」「食べた後に甘みが残る感じで…」というような感想で、まさにビミョーということらしい。

徒歩約10分で市民会館に到着。山響F Cの伊藤事務局長は「山形テルサという音楽専用ホールがあるのに、音響の悪い市民会館で残念」と悔しがっていましたが、しばらく開場時間を待って入場。まずはロビーで、山響F CやSPCの皆さんと久しぶりの再会を喜び合いました。

ホールは1200席程の大ホールでした。山響は楽員50人位の小編成のオケですが、当日はエキストラを入れて80人程度の大編成。3ファンクラブの会員である栄浪さんも「こんな大編成の山響を見たのは初めて」と驚いていました。プログラムは前半が、グリーク「悲しき旋律」、シベリウス組曲「ペレアスと

メリザンド」、後半がショスタコービッチ「交響曲第5番」でした。

山響初登場のせいか、尾高さんはいつもよりも熱のこもった指揮ぶりで、楽員もよくそれに応えて良い演奏をしました。ホールの響きは確かに良くありませんが、そんなことを感じさせない熱演で、満席の聴衆から熱狂的な拍手を受けました。その熱演にもまして、我々一行を驚嘆させたのは聴衆のマナーの良さでした。元々山形は文化のレベルが高い街として全国に知られています。キタラを始め全国どこでも合間の咳が問題になっていますが、満員の聴衆なのに咳をする人はほんの4・5人で、それも控えめでほとんど気になりませんでした。多分、全国的にも珍しいのではないのでしょうか。

我々はさわやかな気持ちで、交流会が行われるグランドホテルに戻りました。交流会は10時開始。深夜の開催なのにホテルは気持ちよく対応してくれ、山形発祥の「芋煮」まで用意してくれました。



山響FC加藤会長

SPC工藤会長

西川事務局長

交流会終了後、札幌くらぶと山響F Cの面々は近くの居酒屋に場所を移し、午前1時過ぎまで音楽の話題等で話の花を咲かせました。話はいつまでも尽きないことでしたが、朝にはせっかく山形に来たのだからぜひ山寺（立石寺）に行こう、という計画でしたから切り上げることにしました。

朝8時にホテルをタクシーで出発して山寺へ。何百段あるのか分らない石段をへとへとになって上りました。芭蕉が訪れたのは新暦で7月ですが、「閑かさや岩に染み入る蟬の声」の雰囲気は十分に味わえました。

帰途はJRで市内に戻って、昼食には山形名物の「板蕎麦」を味わい、山交ビルへ。仙台空港への直通バスで山形を後にしました。楽しくもあり、有意義でもあった山形への旅でした。（佐藤良次）

印象に残る協演者③



今は亡きチェコの指揮者ズデニェク・コシュラーは、1963年のミトロプーロス国際指揮者コンクールでアバドと1位を分け合った名指揮者で、札幌には72年11月第121回定期、75年11月第154回定期、76年9月第163回定期そして同年12月の「第九特別演奏会」、78年第185回定期に登場した。

ズデニェク・コシュラーはまた、チェコ・フィルの音楽監督の座を、ヴァーツラフ・ノイマン（85年に札幌を指揮した）と争った。指揮は明快そのもの、オーケストラの響かせ方も音楽の流れも実に自然だった。

第1回目、72年の時、私はまだホルン奏者だったのでゆっくり話をする機会がなかったが、お国もののドヴォルザーク「新世界から」は特別の造りをしなくても、説得力ある素晴らしい演奏だったのは当然と言えるかも知れないが、同じ演奏会にあったメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」は、オーケストラには物足りないほど淡々とした演奏だった。定期会員に印象を聞くと、オーケストラのバランスは絶妙で透明感があり美しかったとのことだった。

78年の時は夫人同伴で来札した。指揮者の奥方は何故かバレリーナが多く、コシュラーを初めヤン・クレンツ、セルジュ・コミッシオーナなどが顔も姿も美しく、背の高い奥方を誇らし

げに連れ歩いた。

第九の時、「東京の合唱団はアマチュアで地方の札幌にはどうしてプロの合唱団があるの」と聞かれて、「札幌もアマチュアなんですが」「いや、そんなはずはない、ドイツ語の発音も素晴らしいし合唱のレヴェルが高い」と言われたものである。実はこの時の4人のソリストは全員チェコのオペラから来た人達だったため、チェコ語特有の子音の強い発音が抜けず、札幌の二代目常任指揮者ペーター・シュヴァルツに鍛えられた札幌の「第九合唱団」のドイツ語が余計にきれいに聞えたためだったのだろう。コシュラーは、本番の直前までソリストにドイツ語の発音を指導していた。

この真面目人間コシュラーは、底抜けに人が良くて、78年夫人と共に現れた時はまるで子供のような感じだった。「前に来た時ね、お土産に20センチ程のクロコダイル（鱷）を買って帰ったんですよ」「検疫などどうしたのですか」「係員に紐をかけたボール箱に入ったクロコダイルをクロコダイルだと説明したんだけど、開けても見なかった」「お2人で出かける時はお子さんが面倒を見るのですか」そばから奥方が「この人が子供だからほかに子供は居ません。鱷にはコシュラコフと言う名を付けて、動物園に預かってもらっているの」と言うことだった。

(竹津宜男)

from 「札幌くらぶ」

韓国公演ツアーにいらっしゃいませんか

今月末、札幌は「日韓友情年2005」記念事業として初の韓国公演を行います。29日には「ソウル国際音楽祭招請演奏会」を、30日には大田広域市で「大田文化芸術の殿堂開館2周年記念事業」の一環の演奏会を行います。

JR北海道と道新観光ではこの公演鑑賞のツアーを企画しています。会員の皆様には、既にこのツアーの資料をお送りしています。この機会に韓国に行き、札幌を応援しませんか。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 トランペット首席奏者

ふくだ よしあき
福田 善亮 さん

ご出身は

1960年、石川県加賀市の生まれです。父の勤務の関係で、小学校3年から美深、中学校は江差、高校は函館と道内で育ち、今も実家は函館です。

音楽との出会いは

特別なものはありません。両親が音楽好きでしたので、子供の頃から音楽が好きで、小学校の頃はリコーダーや鍵盤ハーモニカなんかの合奏が楽しくてその頃から将来は楽器奏者として生活することに憧れていました。

トランペットになったのは

ピアノや弦楽器では今からでは遅いと思っていた時に、中学校のブラスバンドで練習しているラッパの音を聞き、これだと思って中学校でブラスバンドに入り、トランペットを始めました。

その後の経緯は

高校2年の時から音大進学のため、当時札幌の首席だった杉木峯夫先生に習い始め、月に1・2度札幌に通いました。音大を卒業した後は、1年弱アンサンブルやオケのエキストラをして、新日フィルに副首席で入団しました。2年3カ月しか在籍しませんでした。今ではずいぶん長くいたように感じています。小澤征爾さんの指揮で何度も演奏しましたし、アルゲリッチやジェシー・ノーマンなどの超一流音楽家とも協演しました。86年に東京都交響楽団に首席奏者として入団し、19年間在籍しました。

札幌入団のいきさつは

音大の頃からずっと、機会があれば札幌で、という気持ちでいました。実家が北海道ということも理由の一つではありましたが、とにかく、東京での生活には馴染めませんでした。人込み、梅雨、冬に雪がないという生活にうんざりしていました。そんな時、前から知り合いだった宮澤事務局長からプレーヤーを探していると聞き、迷わずに「僕では駄目ですか」と手を挙げました。



札幌のイメージはどんなものでしたか

環境の良いオケで響きが良いと感じていました。東京のオケは、一般に力で押す演奏というタイプですが、札幌は軽やかで自然な響きのオケと、杉木先生から何度かエキストラで呼んでいただいたりしてずっと感じていました。

トランペットの魅力は

一般には勇ましいイメージが強いと思いますが、甘い音での演奏も魅力ですし、アンサンブル等で陰に回り、ピアノでのハーモニーなんかも気持ちいいですね。古典音楽ではトランペットはティンパニーと共に基本リズムを刻む楽器でもあったのですよ。

趣味はお持ちですか

お笑い番組を見たり、温泉に行くという程度のものですが、実は仏像を見るのが好きなんです。先日も「円空展」に行ってきました。仏像を見るというだけの目的で奈良や京都に何度も行っています。特に、宇治の平等院鳳凰堂の国宝「雲中供養菩薩」、あの天女みたいな楽器を演奏している何体かの小さな仏さんが好きです。

将来の夢を

私個人としてはお話しするようなこともありませんが、札幌が今以上に人気が出て定期会員も増え、いつもチケットが売り切れになるようになればということが最大の希望です。北海道在住以外の人達も「札幌に行けばいい音楽が聴ける」と言って、札幌に足を運んでくれるようになればと思っています。

ファンの皆さんに一言

トランペットは休んでいる時が多くてボーとしていられると思われがちですが、心ではしっかり音楽をしています。ご声援下さい。

札幌交響楽団 チェロ首席奏者

いしかわ ゆうじ
石川 祐支 さん

ご出身は

名古屋市です。大学で東京に行くまで名古屋で育ちました。

音楽を始めたのは

母がピアノをやっているのを聞いて、祖母から「母親が音楽をやっているのだから、あなたも」と言われていましたが、何となくいやでした。でも、5歳からピアノを習い始めました。

チェロになったのは

8歳の時に、妹がヴァイオリンをやっていたので、それより大きな楽器をやりたいと母に言ったようです。それで、妹のヴァイオリンの先生に紹介していただいて、東京芸大の松下修也先生にチェロを習い始めました。先生が作陽音大に来られるような時に、名古屋や豊橋に寄って教えていただきました。その後、小学校の高学年になってからは、地元ジュニア・オケに入り、その指導者の先生に習いました。

専門にやろうと思ったのは

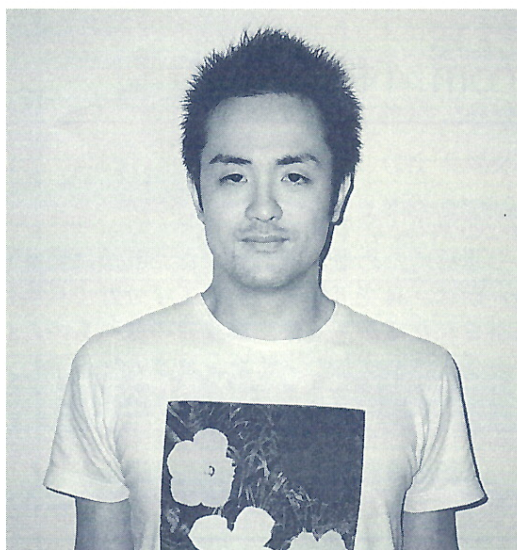
ジュニア・オケに入って間もない頃、当時、親戚のお兄さんに勉強を見てもらっていましたが、その人が音楽にも詳しく、ヨーヨー・マのCDを聴かせてくれました。本当に衝撃を受けました。それからチェロのとりこになり、絶対プレーヤーになろうと思いました。

札幌に入団されるまでの活動は

音大を卒業して研究科に入った年に第68回日本音楽コンクールという、結構権威のあるコンクールに出場し、優勝出来ました。その後は、フリーで活動し、いろんなオケのゲスト首席などをしていましたが、東響の首席のオーディションがあって入団しました。在籍は1年8カ月と短かったのですが、いろいろと貴重な勉強をさせていただきました。

札幌入団のきっかけは

入団前1年間くらい、ゲスト首席で呼んでいただいていた。こんなオケで首席で在籍できればと内心では思っていました。事務局長から「首席を探しているんだが、どう、来ない」というお話があって、本当にびっくりしましたが、即座に「よろしくお願ひします」とご返事しました。



札幌のイメージはどうでしたか

ゲストで来ていて、低弦がしっかりしており、何よりもオケ自体が上手であたたかい。こんな大きなオケでやれたらと、ずっと思っていました。

札幌での暮らしはいかがですか

まだ5カ月ですが、夏は外は涼しいのに家の中は風も通らずに暑くて閉口しました。でも、湿気がなく、本当に過ごしやすかったです。特に、梅雨のない6月から7月の時期は過ごしやすかったですね。そして、何よりも食べ物が美味しい。ずっと苦手で食べられなかった、魚の光り物なんかも食べられるようになりました。

冬はまだ経験していませんが、4月に来た時でも結構寒かったので、冬になったらあの時の寒さ以上になるんだなと思って、実は今から内心ではビクビクしています。

将来への夢は

チェロを本格的にやろうと思ったのがヨーヨー・マへの憧れでしたから、将来ソリストとして活動できればと思っています。実現出来るかどうかは分かりませんが、私は死ぬまで高く大きな夢を持ち続けたいと思っています。

ファンの皆さんに一言

聴衆の皆さんはどうしても高音楽器のメロディーを中心に音楽を聴く傾向が強いと思いますが、私たちがやっているベースラインはその高音楽器を支える役割をしています。高音楽器の美しい演奏を低音楽器がいかに支え、オーケストラ全体のバランスがどう保たれているか、というようなことを少し意識して聴いていただくと、一層演奏会が面白く、楽しいものになると思います。

(佐藤良次)

山科前会長ご逝去

北海道大学名誉教授で札幌くらぶ初代会長を務められた山科俊郎氏が、7月30日、白石区の病院で胃癌のため逝去されました。葬儀は密葬で行われたということです。

氏は、真空工学・表面性工学分野で日本における先駆的な存在で、日本原子力学会賞論文賞を受賞されたほか、道民に馴染みの深いものとしてはスパイクタイヤの規制を実現させ、北海道科学賞を受賞されました。また、日本人宇宙飛行士第一号の毛利衛さんの恩師として知られています。一方で、音楽を愛され、平成8年の札幌くらぶ発足から平成14年まで初代会長を務められました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

上田会長談話「音楽を愛し札幌を愛した山科さんは、札幌くらぶ初代会長を務め、くらぶの基礎を築きました。ご逝去の報に接し、心から哀悼の意を表します。」

会員からのアイディア募集結果

これからの札幌くらぶの活動はいかにあるべきか、というテーマで会員の皆様にハガキで意見をお寄せいただくよう呼びかけましたが、6件のご意見が寄せられました。いずれのご意見も今すぐを実現するのは難しく、今後スタッフ会議で実現の可能性を探る検討を続けていきたいと思っております。ご協力に心から感謝申し上げます。

スタッフの勉強会を継続実施

総会の席上、西川事務局長から、10年を迎えようとする札幌くらぶの活動を、一つの節目にもう一度基本から考え、新たな活動の道を模索しよう、ということ今年度の重点課題にし、そのために会員や関連する多くの人々の意見を拝聴し、指針造りをしたい旨の発言があり、了承されました。上記の通り、会員の皆様からのご意見は既にスタッフ会議に報告されておりますが、その後、7月25日には北海道新聞の「演奏会評」の執筆者、また、音楽批評誌「ゴーシュ」の編集長としてご活躍の北海道情報大学助教授の三浦洋さんをお招きして、スタッフの勉強会を開催しました。(上写真)



更に、8月9日には札幌事務局長の宮澤敏夫さんのお話を伺いました。(2・3ページに掲載)

9月5日には楽員さんを代表してホルンの市川雅敏さんのお話を伺いました。すべてを詳しくご報告することは出来ませんが、今後の活動へのヒントとなるような内容が多くありました。この勉強会は今後も継続し、札幌くらぶの活動の更なる発展のため、スタッフ一同真摯に各界の皆様のご意見を承っていく予定です。適切な時期に皆様にご報告出来るものと思っています。

編集後記

今年初めて定期が7・8月に無いというのを経験しました。定期2公演化などの関係だと思えますが、何となくずっと札幌を聴いていないという感じがします。

各オーケストラにそれぞれの事情があるのでしょうが、山響の定期の日程も変則的で、当初は山形交流会は10月か11月頃と考えて、多くの会員に参加してもらおうと思っておりましたが、

10・11月には山形での定期が無いことが分り、急遽8月になりました。そのため、期間が無かったこと、韓国公演と近過ぎるなどの理由で会員の皆様への呼びかけは出来ませんでした。事務局の情報不足で、お詫び申し上げます。

その代わりといっは何ですが、来年9月頃を目途に検討されている札幌交流会には多くの参加を期待しています。(佐藤良次)